

2016年度 帰国隊員/青年支援プロジェクト 実施報告書		提出日 2017年 7月 14日
氏名：猪浦 智史		実施国：タイ
		調査研究
活動名称	国際大学に所属するタイ学生のレジリエンスの特性に関する調査研究 Factors associated with resilience among Thai students in international colleges	
実施期間	2016年7月1日から2017年6月30日	
(1) 申請した動機		
<p>国内外での地域保健活動や自分自身の家族体験から、地域で暮らす物質使用障害者(アルコール依存症等)に対する社会資源不足や家族支援が十分に行えていない現状や同じ境遇(逆境体験)を持つ子供でも育ちや病気のなりやすさに相違がある先行研究を知り、この事実を調べているうちに「レジリエンス」という言葉に興味を持ち始めました。</p> <p>特に、タイの現状として、急激な社会経済的構造の変化、薬物乱用、貧困、地域格差、両親の出稼ぎや離婚による核家族化や子供の孤立等、子供たちが抱えるストレスが多い環境であること、また、タイ国内でのレジリエンスに関わる先行研究が少ないことを理由に、調査研究の実施を決定しました。</p>		
(2) 活動内容概要		
2016年		
7月1日～2日	チェンマイ大学にて、修士論文、主担当及び副担当指導員と研究計画打ち合わせが開始し、研究計画書作成(第1-3章)開始	
7月2日～29日	データ収集予定先との研究計画打ち合わせ(タニヤラコンケン病院)及び研究計画書作成(第1-3章)	
7月31日	研究計画書提出及び口頭試験	
8月2日～9月30日	質問票の作成及び日本での試験調査、試験調査データ集計及び分析	
10月3日～5日	国際会議出席(5th International Conference and Exhibition on Addiction Research & Therapy at Atlanta, USA) 試験調査結果発表	
10月19日～12月28日	研究計画書(第1-3章)を変更し、口頭試験	
2017年		
1月4日～10日	研究計画書を修正し、倫理委員会審査会へ	
2月11日	倫理審査委員会より指示があり、研究計画書の修正	
2月21日	倫理委員会より研究実施の承諾	
2月22日～5月3日	研究調査用の質問用紙の作成及び調査実施関係機関との連絡調整 研究論文の第4-6章作成及び学術誌 Public Health and development への提出準備	
5月4日	新研究計画書に基づいた、タマサート大学にて30件の試験調査の実施	
5月5日	ラングシット大学にて本調査	
5月18日～19日	タマサート大学にて本調査	
5月18日～19日	マヒドン大学にて本調査	
5月19日～6月7日	本調査データ分析、論文第1-6章作成、学術誌用論文作成	
6月8日	修士論文最終口頭試験発表会	
6月8日～23日	各関係者や試験官より助言をいただき、修士論文及び学術誌論文を修正し、製本へ	

(3) 活動の成果・苦勞した点・反省点等

〈活動の成果〉

バンコク又はバンコク郊外の国際学校に通う18歳から24歳までの学生を対象に横断研究を実施し、366件の有効回答を得ました。レジリエンスの平均値は71.9で、先行研究での国際データと比較すると低い結果でしたが、他のアジア諸国と比較すると高い数値でした。また、対象者の53%が高いレジリエンスを示し、先行研究の数値より高い結果でした。レジリエンスに関わる影響要因として年齢、ピアサポート、家族の収入が有意差を示し、困った時に助けてくれるピアの存在と年齢を重ねるにつれてレジリエンスが高まる可能性、さらに、家族の収入の低さが子供のレジリエンスを下げる要因であることを示唆しました。逆境的小児体験については、レジリエンスと直接な関係は見つけれませんでした。中等度の逆境的小児体験と低度の逆境的小児体験の間に、レジリエンスの平均値の差が見られ、逆境的小児体験が少ない学生の方が、中等度の逆境的小児体験を持つ学生より有意にレジリエンスが高い結果となりました。さらに、先行研究より、そもそも低いレジリエンスを示す個人は、逆境的小児体験の強度に関わらず、逆境体験に対処することが難しいとの議論もあり、結論として、逆境体験に肯定的に適応できる保護因子を明らかにすることが、今後のレジリエンスの研究に有効であると考察しました。

〈苦勞した点、反省点等〉

-研究調査実施までに、指導官とのやり取りで多くの問題がありました。その原因として、担当指導官の多忙さがあり、計画的に調査実施ができない現状がありました。なので、計画的に実践できなかったことが大きな反省点です。

-レジリエンスと逆境体験の関係性に関わる先行研究が少なく、情報収集に時間がかかりました。

(4) 今後のプラン

教授と連携して、刑務所や児童更生施設で暮らす依存症者への教育プログラムや病院を含む各更生施設等での支援者に対する心理教育等の研修会や各種勉強会での教授の支援を行う予定です。また、日本での教育機関や社会復帰施設と連絡を図り、施設見学やタイでの学びを共有する機会を設けています。その為、タイでの経験を共有すべく、日本とタイ国内の架け橋となれるよう、各種研修会や学会に足を運び、積極的に交流を持ちたいと考えています。また、2018年4月より、国立精神神経医療センターにて、流動研究員として、活動予定です。